



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

# 「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

## 第3回：深谷編（下）

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之  
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

### 8 官尊民卑打破へ目覚める

14歳で家業の藍玉の商売を手伝い始めた栄一は16～17歳になる頃には、すっかり一人前となり大きな戦力になっていた。年4回の信州などの得意先回りもこなしていた。また、家業も順調で、藍玉作りや養蚕の他にも雑貨屋や質屋を営むなど、ますます繁盛し、父、市郎右衛門は名主見習いに出世していった。そんな頃、栄一が17歳の時に、その後の彼の生き方を左右する大きな“事件”が起きるのだった。

血洗島村の領主は、前にも述べたが、岡部藩安部撰津守という家禄2万石程度の小大名で、村から一里ばかり離れた岡部に陣屋を持っていた。小大名であるので、大きな金を借りるわけではないのだが、やれ先祖の法要だとか、お姫様の嫁入りだとかで、事あるごとに領内から御用金を徴収していた。同藩の御用達となっていた栄一の家からも、用立てた金額の合計は積りに積もって2,000両余りにまでも達していた。

17歳の時に領主が村へ1,500両ばかりの御用金を命じ、栄一の家でも500両を用意しなければな

らなくなった。ちょうど代官から呼ばれた日は父の都合が悪かったので、栄一が父の代理として、同じく御用金を言いつけられた家の2人と一緒に陣屋へ向かった。父からは「とにかく話を聞いてきなさい」という約束だった。他の2人は一家の当主であるから、その場で御用金を承知した。栄一は、父の代理であったし、「話を聞いてきなさい」という約束もあって、「御用の趣きはよく分かりました。一応、村に帰って父に話した上で、改めてまかり出ます」と返答したのである。

すると、代官の態度が一変し、軽蔑して嘲笑うように、「貴様はいくつになる？」「はい、私は17歳でございます。」と返答する。すると代官は、続けて、「17歳にもなれば、もう遊蕩などもするんだろう。であれば300や500両くらいの金は貴様の一存で承知ができるだろう。貴様の家であれば500両くらいは何でもないはずだ。親父に相談するなどと言っても、俺は承知できない。この場で、兎に角お受けしろ。」と言い寄るのであった。その後、押し問答して、栄一は何とか岡部の陣屋から引き下がった。栄一は帰宅すると事の次第を父に報告した。

しかしながら、父は「それが泣く子と地頭には勝てぬ」ということだと言って、翌日500両を持っ



妻千代  
(渋沢史料館所蔵)

て陣屋に行ったのである。

栄一はその後、様々な機会をとらえて、この件について語り、書いている。それらを取りまとめると概ね以下の通りになる。

～領主は年貢を取り立てながらも、何かにつけてカネを取り立て、返済もしない。それにしても陣屋の役人の態度はなんだ。いかに身分が違うとはいえ、我々が頼まれる側なのだから、年齢が若かろうが、身分が低かろうが、それ相当の扱いをするのが当たり前だ。私の人格も認めず、叱りつけ、嘲弄するなど、けしからん態度である。決して知識のある人の振舞とは思われない。元来人間は、賢愚の差別によって、尊卑の差別も生じるはずだ。幕府の政治向きが思わしくないのは、こんなことが原因になっているのだと感じた。

私はどうかして、一廉の人間(百姓をやめて)になって、是非とも彼らを見下してやるようにならねばならないと深く決心した。侮蔑に対する憤慨の念は、心魂に徹して、どうしても忘れることが出来なかった。～

これほどまでに陣屋で代官から受けた叱責を不条理と感じたのも、身分社会の憤りも、栄一がそれな

りに学問を修めていたこと、世の中の在り方などに精通していたことの証でもあると思える。

栄一の四男の渋沢秀雄氏によると後年の栄一は食卓でこの話が出ると、「本当に横っ面をハリ倒してやりたいほど腹がたったよ。」と語っていたそうである。

このころ栄一のもう一つの人生の側面としては、尊王攘夷運動の“仲間入り”をしたことだろう。学問の師である従兄弟の尾高惇忠、その弟の尾高長七郎、従兄弟の渋沢喜作らと盛んに国事の議論をするようになった。そんな栄一の様子を見て、心配になった父は、近所でも評判の若旦那で自慢の息子でもあった栄一を落ち着かせる意味もあり、彼を結婚させることにした。栄一18歳、お相手は彼の人生の師、尾高惇忠の妹の千代であった。

## 9 江戸遊学を経て“暴挙”を計画

栄一の人生の師と紹介した従兄弟であり、義兄となった尾高惇忠には、弟の長七郎がいた。彼は剣術において非凡な才能を持っており、その腕は関八州で並ぶものなしとも言われていた。既に江戸へ出ていた長七郎は、江戸から友人たちを連れ帰り、栄一らと世を憂い、よく議論をしていた。これに刺激を受けていた栄一は、「自分もついに22歳になってしまう。このまま田舎で百姓をしているようでは成し得られぬ」という覚悟を持って、父に江戸遊学を申し入れた。なんとか父を説得して、文久元年(1861年)3月から5月までの2か月ほど江戸遊学を実現させた。栄一は当時を振り返って、「家を捨ててでも、この希望を達成(江戸遊学)したいという心持ちだった。」と言っている。

長七郎を頼りに下谷練堀小路(現千代田区神田)にある漢学者 海保漁村の塾に入り、ともに神田お

玉が池の千葉道場で北辰一刀流を学んでいる。栄一は、江戸で受けた様々な刺激を抑えることは出来ずに郷里、血洗島に戻っても、“尊王攘夷の志士”としての意識が高まって家業もおろそかになっていき、父からもたびたび叱られていた。栄一は、この頃を振り返って「22歳ころから京都に行く24歳くらいまで父がいかに心配してくれていたかを考えますと、私がいかに親不孝であったかと思えます。」と語っている。

## 二回目の江戸遊学

2年後、文久3年（1863年）24歳の春、既に憂国の志士を気取っていた栄一は、どうしてもじっとして家にいることが出来なかった。そこで、父に再度の江戸遊学を願い出たのである。父も最初は反対したが、栄一の決心が固いことがわかると、栄一の願いを許可してくれた。この時も結局4か月、海保塾の塾生となり、千葉道場にも出入りして、前回同様に暮らすこととなった。実はこの年の8月に長女、宇多子が生まれているのだが、栄一の腰は、一向に落ち着かない状況だったのである。

知り合った多くの友人達も全国から江戸に出てきていて、口を開けば、天下国家を論じ、幕府の暴政を罵倒していた。栄一は、昔から主張していた攘夷論の方向へ、より一層、力を入れて活動していこうと決心を固める。決心が固まると、天下の形勢を観望して、じっとして勉強などしてられない。その頃、栄一の頭の中は、攘夷の思想一筋だった。攘夷に対して弱腰の幕府を速やかに倒して、王道を以て天下を治るようにならなければならないという決心に至る。栄一、尾高惇忠、渋沢喜作と三人で密議をおこなって一つの“暴挙”を思いつき計画を立てた。それが「高崎城乗っ取りと横浜外国人居留地襲撃」だった。現在では「テロ」と言えるかもしれない。

実は実行に向けて春ころから、槍や刀、武具などを集め出していた。兵器は鉄砲を手に入れることが一番必要だったが、機密が漏れる恐れがあるので、秘密裏に買い揃えるのが不可能だった。約100人分の槍や刀など、必要な武具を集めたが、この費用は、藍商売の勘定から父親に隠れて栄一が支払った。いわゆる“使い込み”である。金額は150～160両にも上った。

## 父の思い、息子の気持ち

8月頃に計画を決めた栄一は、9月13日には尾高惇忠らを招いて、父と観月の宴を設けた。

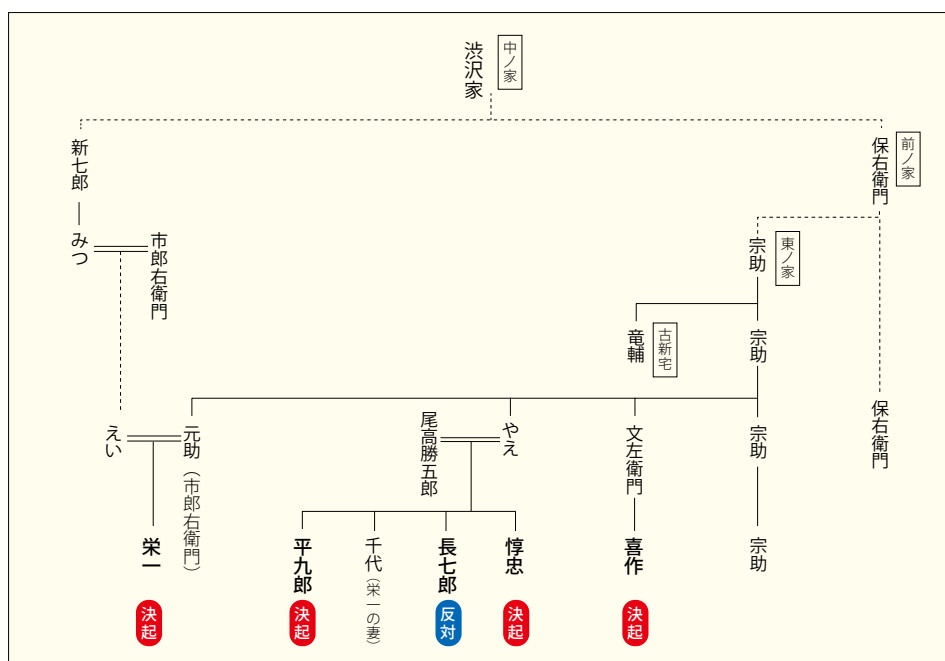
そこでは朝まで父と時勢のこと、身の振り方など大いに議論となった。父は声を荒げることなどは、なかったが、議論は平行線のまま終わりをみたのである。ようやく14日の朝には、父は「もうよい」「勝手にするが良い」と言い、「身を一切自由にする事を許してやるから心のままに振舞うがよい。私は今後一切、お前の相談相手にならない。もう分かった。私は何も言わないから、お前はお前の信ずるところに向かって進んだらよかろう。」と諦めた。使い込んだお金も、これまで商売の金を遊興費に使ったことはなかったので父は許してくれた。

栄一の方から勘当を申し出たが、突然に勘当となると、逆に世間が怪しむので、そのまま家を出るといことになり、両親に暇乞いをして、その日の内に江戸に向けて出発した。約1か月江戸に滞在し、同志を集めたり、さらなる武具の準備などをした。しかし江戸は各藩から集まった人が多く、事前に発覚する恐れがある。最も機密を守らなければならないので、郷里の同志を募るため10月末頃に郷里に戻った。

呼び掛けに集まってくれたのは、総勢で70人程だった。前触れもなく、突然に決起して驚かそうと



渋沢家家系図



いう計画で、焼き打ちなので風向きや強さを考え、冬が良いだろうと、諸葛孔明の赤壁の戦いに倣って、冬至の11月23日を決行日と決めたのだった。

まず高崎城を乗っ取り、兵を整えて、一気に鎌倉街道筋から横浜へ向かえば通行が容易であろうと考えていた。

栄一は、自分たちが旗揚げすれば、江戸や全国の同士も立ち上がるだろうし、外国人居留地の襲撃の責任を幕府が取ることで、自ずと幕府は崩壊して、新しく王をもって天下を治める時代がくる。栄一たちは自分たちの生死は眼中になく、捨て石になる覚悟であった。

「たとえ和親をするにせよ、まず一度は戦って相対の力を比較した後でなければ和親というものではない」、「(向こうには) 堅艦巨砲があっても、我には大和魂を以て鍛錬した日本刀の鋭利があるから、大和魂によって手当たり次第に斬って、斬って斬りまくろう (下線筆者)」、「天下の耳目を驚かすような大騒動を起こして、幕政の腐敗を洗濯した上でなければ、とうてい国力を挽回することは出来ない、

「幕府の保ち得られぬというような一大異変を起こす」これらが栄一たちの思いであった。

## 10 急転直下、高崎城乗っ取り中止へ

江戸や地元での準備と合わせて、決行までには、是非、京都の状況を知りたいということになり、京都にいた長七郎を急遽よび戻した。長七郎は、かつて坂下門外の変への関わりによる嫌疑を避けるため栄一が忠告して、京都へ向かわせていたのであった。そこで京都の世情に詳しい彼の賛意を取り付け、決行に弾みをつけようとしたのだった。10月29日、下手計村の惇忠宅にて再度の意見交換を実施、評議が行われた。

長七郎は、非常に熱心な尊王攘夷主義者で、栄一らよりも過激な思想を持っていた。当然、栄一らの計画に賛同してくれると思っていたわけだが、戻ってきた長七郎は栄一らの計画に大反対。全くの予想外の展開となってしまった。

「今回の暴挙を中止しよう」と言い出した。同志

にとって、全く意外な表明だった。「わずか60～70人の農兵で事を挙げても、負けることは火を見るより明かだ。たとえ高崎城を取ったとしても、横浜外国人居留地へ攻め込むには訓練された兵が必要となる。今のままでは横浜に着くまでに勝敗が決まってしまう。」と付け加えた。

長七郎は、ついに「栄一を殺してでも、この計画は食い止める」とまで言い出したのだった。逆に栄一らは、「貴兄を刺し殺しても、この計画は必ず決行しなければならない」と詰め寄る始末となった。長七郎はあくまで承知しないで、止めることを説いた。栄一は、「自分の決行が失敗しても、天下の同志が四方から奮起してくれるはずだ。死ぬと定めた以上は事の成敗などは天に任せて置いて、ここでかれこれ論じるには及ばない、ただ一死を以て事を成し遂げる。」と言い、激論は一日では終わらなかった。

時間を経て、冷静さを取り戻した栄一らは、軽々しく一揆を起こしてもよい結果になる見込みがないとの判断についに至ったのである。激論の末、長七郎の意見に従うことに決定した。暴挙は取り止めることに決定し、11月初めに全部を解散させたのである。

「今にして思えば、実に無謀至極の暴挙であった。長七郎の意見を入れてなければ、後世に無謀の譏りを残したろう。」と栄一は後年、語っている。

## 11 100両の餞別もらい、故郷を捨てる

中止としたこの企ては、幕府の探偵でもある関八州取締に知られ、手が回っているという話が聞こえてきた。そこで11月8日、関八州の取締から逃れるためでもあり、近所には伊勢参りに行くと言って栄一は喜作とともに故郷を後にした。

この時父は、故郷を捨て、家を捨てる我が子に対



渋沢喜作（渋沢史料館所蔵）

して、「好きなだけ金を持っていけ、餞別としてやる。これを正しい事のために使って、今後は身を誤るようなことはしないように」と温情ある言葉を添えた。そこで栄一らは100両貰って故郷を離れることとした。後に栄一は「不孝の子に対しても、是だけの愛情を注がれるかと思えば、私も心中、涙なきを得なかった。」と語っている。

栄一と喜作は、上方参りの百姓姿で出たが、これから京都に上るのに、丸腰の百姓姿では却って発覚するおそれがある。江戸で武家姿に姿を変えた二人は、一橋家の用人、平岡円四郎の家に向かった。平岡からは、江戸遊学中に、仕官を勧められたこともあった。その時は、「もっと勉強してからご推挙願います」と断っていたのだが、「君らが改めて仕えたいと思ったら、その時は遠慮なく申し出るが良い」と言われていた。栄一とは考え方が違う平岡ではあったが、栄一の潜在能力は高く評価していた。苦肉の策として、これまでの江戸遊学で交流のあった平岡の家来ということで、京都に向かうこととした。平岡家に行き「京都へ行くため、御当家の家来

ということで道中の宿場に通達書を出すので、許可をお願いします」と言うと、家人は「平岡が京都へ赴く際に、渋沢が来て、家来にして欲しいといったら、許可してやってくれ。そして京都へ来るようにと言っていたので～」と承諾した。とは言え、今後どうなるか分からない行く末である。4～5日江戸に滞在した二人は父から貰った100両を元手に吉原などで騒いで、気分も新たに11月14日に京都に向け出発した。

京都に落ち着いてから、一応、平岡へ挨拶に行ったが、一橋家に正式に仕官するつもりもないので、二人で伊勢神宮へ行ったり、京都に諸国から集まってきた志士たちと情勢分析や取るべき行動などについて意見を交わしていた。年も暮れ、正月も過ぎて、2月になっていった。

## 12 万事窮す、一橋家へ仕官

1864（元治元年）年2月早々、両人の境遇を激変させる一通の手紙が届いた。長七郎が江戸へ向かう途中、戸田の渡しで誤って行人を斬り、伝馬町の牢獄に捕らわれていたのだった。

そして運悪く捕縛された長七郎の懐中には、栄一、喜作が送った幕政批判の書簡が入っていたという内容だった。二人は愕然とした。

翌朝、平岡円四郎からの書状により出向くと、「江戸で何か計画した事があつたら、話してみろ」という話だった。二人は「別に計画したようなことはありません」と返答をすると、平岡は幕府から一橋家に尾高長七郎捕縛の件で、栄一らの身分について照会状が届いたというので、やむを得ずこれまでの計画とその顛末、幕政批判などを平岡にぶちまけたのだった。平岡からは、「おまえたちを救う方法は一つしかない。国のために死に急ぐこともあるまい。

この際、志を変えて一橋家の家来になれば、私がお前たちを守ってやる」との話だった。

栄一は喜作と激論を交わした。～志を変えるのか？ここで野垂れ死にするのか？答えは二つに一つだった。潔いと言われても、ここで死んで何か利益があるう？このままでは獄に入れられる可能性すらある。ここは取り敢えず一橋家に仕官しようという栄一が、拒む喜作を説き伏せる形で、これまでの信条とは反対の仕官という異なる道を選んだのである。二人にとっては苦渋の決断だった。狂信的なまでの攘夷論者だった男たちが、一転、公武合体論者で斬新的な開国論者の平岡に一橋家仕官を頼んだ。進退窮まり、2人は平岡の言葉に従うしかなかった。ただ「今更、食べる事ができない。居所がないからお召し抱えください」というのは、情けないので理屈をつけて志願をしようとする事に話が決まった。

### 前代未聞の一橋慶喜との拝謁

そこは転んでもタダでは起きない栄一、彼は、平岡に「我々二人は思う所がある。お召し抱えの際に一橋公に拝謁して、直接申し述べたい。」と大胆不敵な依頼をし、懐に忍ばせていた意見書を渡したのだった。そんなことは前例がないと、当惑する平岡は「結論までの猶予をくれ」と言い、持ち帰った。数日後、平岡から「三日のうちに、一橋公の遠乗りがある。その際に出てきて、顔を見て頂く機会にしなさい。けれどもこちらは駆けていかなければならない。」という話だった。当日、あらかじめ一橋公が通る道に待った栄一と喜作は、一橋公の馬が見えると一気に飛び出して、下加茂から山鼻まで懸命に十町（約1km）余りひた走り、お供した。

その頃の栄一は肥満体で、背も低いから、走り続けることは極めて大変なことであった。

数日後、やっと建言する機会をもてた栄一は、意見書の内容を遠慮なく申し上げた。一橋公は、「ふんふん」と聞いているだけで、一言もお話にはならなかった。しかしながら栄一は、一橋公が少しは、この建言を注意してお聴き取りになったと感じていた。その後の一橋家での栄一の昇進、活躍ぶりを見ると、栄一の建言によって一橋公も彼の能力を見抜いていたのかもしれない。

不本意ながら仕えた一橋家であったが、現実への対応力の強い栄一は、「仕官の身というものも、何か気恥ずかしい訳だけれども、そうなって見るとまた相応の欲望と自惚れも出るから、従って楽しみ

も生じて来た。」と職務に就くと、意欲をもって一橋家の隆盛のため身を削って仕事に励んでいったのである。栄一の建言は一橋家の武力整備から、財政再建まで多岐にわたるものだった。彼の仕事振りは、当然の如く一橋公の認めることとなり、一橋家の下役から瞬間に勘定組頭という要職へ駆けあげていった。そのスピード出世たるや異例中の異例だった。そして活躍の場はヨーロッパへと広がっていくのである。

目まぐるしく変わる時代の大きな流れの中で翻弄されながらも、時代が彼を求め、彼もそれに応え、時代の変革者となっていく。

FUKAYA  
 NATIVE



## 渋沢栄一アンドロイド

深谷市内では、様々なかたちで渋沢栄一に会える。今回紹介する「渋沢栄一アンドロイド」もその一つである。この夏に公開

が始まった「渋沢栄一アンドロイド」は、70歳当時の栄一の風貌を忠実に再現したもので、洋装の立ち姿で身振り手振りを交え、「道德経済合一説」の講義もしてくれる。

講義内容は、1923(大正12)年、栄一が84歳の時に実際に行った内容である。アンドロイド製作で著名な石黒大阪大学教授が技術指導に当たり、深谷市出身の鳥羽博道氏(株)ドトールコーヒー名誉会長)からの寄附金を原資として作られた。渋沢栄一アンドロイドに会いたい方は、深谷市渋沢栄一記念館のHPから予約を入れることをお勧めする。

